

保育の現場から

未就園児たんぽぽクラスの実践

石塚 麻実子

たんぽぽクラスとは…

鎌倉女子大学幼稚部たんぽぽクラスは、二～三歳の

未就園の子どもとその保護者が一緒に通うクラスです。子どもにはその年齢にふさわしい力を十分に發揮しながらやつてみたりことを実現する場を、保護者には家庭教育支援の場を提供することを目的としています。週に一回十七組が通うクラスが二つあり、計五十一組が通年で参加しています。幼稚部の教員二名が主に

子どもと保護者グループを交替で担当しています。そのほかに、併設大学の学生がボランティアスタッフとして、こちらもまた通年で保育に参加しています。

多くの子どもたちにとって初めての集団の場です。すぐに好きな遊びを見つける子どももいれば、保護者の後ろに隠れ、なかなか遊び始められない子どももいて、その様子はさまざまです。

保護者には最初のうちは子どもと遊んでもらうように伝え、子どもたちが安心してこの場でいられるよ

う、また好きなことを見つけて遊び始められるように支えてもらっています。回を重ね、だんだんと安心し、自分の好きなことを見つけて遊べるようになること、保護者だけで集まっておもちゃを作ったり、それぞの子どもに関する心配なことや二～三歳の子どもたちなどについて話し合ったりもします。保護者が同室にいることで、子どもたちはいつでも保護者の元へ行ったり、姿を確認したりしながら安心して遊び続けられるようです。

やつてみたいことを実現する子どもと それを支える保育者

保育室にはままで、アスレチック、ブロック、絵本、牛乳パックの電車、絵や製作などのコーナーがあり、子どもたちは好きなことを選んで遊びます。最初は保護者と一緒に遊んでいるところに保育者がかかわります。子どもたちは保育者が話しかけても無反応

だつたり、気づかないふりをしたりします。そうやって、この見知らぬ大人がどういう人なのかを確かめているようです。保育者は傍で子どもと同じようなことをするなどして、少しずつかかわっていきます。そのうちに警戒や緊張がとけ、安心して遊び始め、保育者にもご飯を作つて差し出すなど、簡単なやりとりが見られるようになります。

そしてこうした経験を重ねていくうちにだんだんと保育者と遊ぶことがおもしろいとわかつていきます。最初は保育者と二人で遊ぶことが多く、保育者はどこに何があるのかを伝えたり、遊んで見せたりします。子どもたちは保育者のする様子をじっと見つめたり、同じようにやつてみたりします。そして、やがて“自分の遊び”になつていきます。

同じ場に他児がやつて来た時には、保育者はわざわざ「今、○○ちゃんと○○してるの」など、状況を説明して、気づきを促します。驚かされるのは、子ども

たちは本当によく周囲を観察し、同じようにまねをするということです。このようにして、物事を理解していく、興味の重なる人たちが保育者の元に一人一人と集まって“ゆるやかなまとまり”ができます。子ども同士の直接的なやりとりはまだ活発ではないとしても、その場に一緒にいる雰囲気を感じているよう、にこつと笑い合う場面も見られます。

子どもたちは同じことを何度も繰り返すことが好きです。保育者は遊びの発展に急ぐのではなく、その繰り返しにじっくりとつき合い、おもしろさを共有したり、気持ちを通わせたりしながら楽しみます。

また、子どもたちは自分のやってみたいことを見つけ、やつてみます。しかし、自分ひとりではできそうもない時、大人が手助けをすればできそうであれば、保育者は何とか実現できるように支えます。そして、困った時には大人の助けを借りれば実現できるということを、体験を通していきます。その中で、保育

者は子どもたちが自分で気づいて行動できるようにと配慮しながらかかわっています。たとえばアスレチックの高い所からジャンプをしてみたい子どもがいた時、危ないからダメと止めるのではなく、周りに人がいないかよく見てからねと言います。保育者には、たんぽぽクラスは「何でもかんでもアリ」というふうに最初は受け止められがちですが、周囲との関係の中で自分の行動を調整させながらやつてみたいことを実現する力を身につけることの大切さを繰り返し伝えていきます。

保護者が子どもについて抱える心配事と 新たな子どもの姿の発見

最初の保護者の自己紹介では必ず二つの事柄が出てきます。それは集団に適応した行動が取れるように、友達と仲良くできるようにということです。それが保護者の願いであり、このクラスに求めていることで

す。ですから、子どもが自分にくつついでいる無理に引き離そうとしたり、離れないことにいら立ちを感じたりします。また、親子みんなで遊ぶ時間には子どもがまだこれをしたいということがあつても、無理に連れてきて参加させようと躍起になります。けれど、なかなか入らないのですますイライラが募ります。保育者は集団に適応できることや友達と仲良くするよりも、まず子どものやつてみたいという気持ちを大切にしたいと考えています。やつてみたいことを実現する中でしっかりと自分をつくっていく時期だと考えるからです。しかし、保護者の思いとの温度差を縮めていくことはなかなか難しいことです。

そのほかにも、保護者は子どもに関するさまざま不安や心配事を抱えています。たとえば、「家では活動でよくしゃべるのに、ここに来ると人が変わったようにおとなしくて本来の姿ではない。どうしたんだろう?」と、この場に来て初めて目にするわが子の姿に

驚きを隠せない保護者もいます。また、自己主張が強く、言い出したらきかない、わがままだと、兄姉やその友達と一緒に遊ぶ時は平気なのに、同年代の子どもはうまく遊べないなどの心配もあります。また、友達には自分の主張をはつきりと言えないとか、ものの貸し借りができないことなどもよく聞かれます。そういう一つひとつ的心配事に保育者はこの年齢の発達の中ではごく自然な姿であり、そこを解決していくためには大人の助けが必要であることを説明します。

一方で、保育者とかかわるわが子を見て、新しい発見を見るのもしばしばです。

「この子はこんなことを楽しむんだ」「こんなにおもしろがっている表情を見るのは初めて」という人もいます。自分との関係の中でとらえられる子どもの



姿だけではなく、他者との関係の中の子どもの姿を客

観的に見て新しい一面に気づいたり、いろいろな子どもたちを見る中で自分の子どもがどういうタイプかを理解したりする機会にもなります。

それだけでなく、保育者が子どもとかかわる姿を見ることを通して、親は子どもへの新しいかかわり方を身につけていくことも学期末のアンケートからわかりました。保育者は、たとえば一つのものを取り合いになつた時には、あれこれかかわってみてお互いの気持ちの折り合い点が見つかるように支えます。大人の意見を一方的に押しつけたり、言うとおりに動かそうとしたりするのではなく、こうしたいという気持ちを受け止めながらも、どう解決しようかと一緒に考えます。いわゆる「交渉する」姿勢です。交渉する様子を見て、解決するためにはいろいろな方法があることが子どもたちにもだんだんとわかっていきます。こういう経験の積み重ねを通して、子どもたちは自分を他者

との関係の中で調整する力を身につけていきます。

保育者は保護者と同じようなやり方をしてほしいと意図しているのではなく、子どもの育ちを支える方法の一つとしてかかわっているのですが、傍で見ている保護者は保育者とかかわる子どもについて、こうかかわるとこういう姿を見せるなど行動の経過を見ることがになり、いろいろなかかわり方があることを知ります。そして自分にできる方法を試してみるようです。

たんぽぽクラスで大切にしていること

たんぽぽクラスでは家庭教育支援として三つのことを大切にし、保護者に伝えていきたいと考えています。
①保護者が子どもを理解する新しい見方に気づき、いろいろなかかわり方があると知ること
②保護者もクラスの場をつくるひとりであり、一人ひとりが協力してクラスを支えていくこと
③自分の子どもだけでなく、他の子どもたちにも積極的にかかわる、一

一緒に育て合うことです。

②の“場づくり”は、たとえば、子どもと一緒に楽しむ大人としてその場にいる、集まる時に大人がさつと集まる、次の活動へ移るための片づけも大人が率先して行うなど、場（環境）をつくる役として働くことです。子どもを支えるということは、単に子どもとかかわるということだけでなく、場をつくることも大切なことだと改めて気がつく親も多いのです。この場づくりは親子一緒にクラスならではの視点ですが、日常生活の中でも親が子どもの視点に立って考えたり、かかわつたりするのに役立つだろうと思いません。

その年齢の育ちに適切なかかわりを！

たんぽぽクラスでは二～三歳の今の育ちを大事に支えていきたいと考えています。幼稚園に入るための準備として、集団に適応できることやルールに従うことを身につけるよりも、この年齢にふさわしい力を十分

に発揮できるように支えています。
このごろは大人が早く早くと急いで育てようとしているように感じます。子どもの可能性を伸ばしたいとたくさん習い事をさせている保護者もいて、子どもたちは毎日忙しく過ごしています。しかし、この年齢の子どもたちは主に家庭でじっくりと生活する中で多くのことを身につけていきます。自分でできることは（できないことも）自分でやつてみたい子どもたちです。そうやって自分の手で、足で経験して、生活の中で生きる基礎をたくさん身につけてほしいです。

保護者が子どもと毎日を共に暮らしながら保育者と同じようにかかわることには限界があるだらうと思います。しかし、たんぽぽクラスで共に過ごす中で、子ども们的育ちの支えどころは一体どういうことなのか、自分にできそうなことはどんなことなのかを保護者が考える機会となることを願っています。